

# 秘密裏に開封 次々英訳



郵便物をチェックするCCDの検査場。大阪府(山本武利・早稲田大名誉教授がアメリカ国立公文書館から入手)

## 国民監視

### 日本人ピーク時6千人

#### 郵便検閲の真実 ①

戦後、GHQ(連合国軍総司令部)占領下の日本で、日本人を使った大掛かりな郵便検閲が展開された。さかのぼれば戦時中も、兵士らが前線から家族や友人らに送った郵便物は、憲兵によってひそかに検閲が行われていた。特定秘密保護法が成立し、監視社会の再来を懸念する声もある中、郵便検閲の真実に光を当て「国民監視」の実態に迫る。

ローマ字で書かれた名簿には、氏名や給与、階級などが克明に記されていた。「郵便検閲の実像に迫る証拠を前に、胸がいっぱいになりました」。山本武利・早稲田大名誉教授(メディア研究は昨年5月、検閲にかかわった日本人延べ約1万3千人分の名簿を国立国会図書館で発見。今も、このときの感動をかみしめる。

占領下の検閲問題に詳しい山本氏によると、検閲工作を担ったGHQの「CCD(民間検閲局)」は1945(昭和20)年9月から49年10月にかけて活動。ピーク時の47年には8132人の日本人が働き、このうち郵便検閲には最も多い約6千人が従事した。「当時の産業としては最大規模」といっ

46年から2年間、福岡市のCCDで働いた神奈川県横浜市の道正誠之さん(90)もその1人だ。

「学校で習った程度の英語力しかなかったが、私たちが見た後に、英語がもっと堪能な日系2世らが目を通していった」

給与は日本企業の倍以上。成果主義、男女平等の先進的な職場だった。「時間内に最も多く手紙を訳した人に休暇を与える」と言われ、実際に一番を取って休みをもらったこともある。検閲官を集めてクリスマスパーティーも開かれていた。

職場の前にあった食堂から、おいしそうなおいがしていたのを覚えていた。「子どもだったころの豊かな日本のおい。日本はここまで立ち直れるだろうか。羨望に似た思いもあったかもしれない」。日本はまだ、食うや食わずのどん底の状態にあった。

道正さんは東京大に進学。学費はすべてCCDの給与でまかなった。「生きるか死ぬかの時代。まして日本は敗戦国。当時としては仕方がなかったと思います」

同じ福岡市のCCDで働いた甲斐弦・元熊本学園大名誉教授(2000年死去)は後に、占領下の検閲体験を著書の中で明らかにしている。(岡恭子)

#### Q ズーム

GHQの郵便検閲 占領下の情報統制のため、郵便物のほか、出版物や電報の検閲、電話の盗聴も実施。山本武利・早稲田大名誉教授によると、東京、大阪、福岡を拠点に、郵便は2億通、電報は1億3600万通開封された。電話の盗聴は80万回にも上った。